

夜行巡查

泉鏡花



「こう爺じいさん、おめえどこだ」と職人体の壮俊わかものは、そのかたわらなる車夫の老人に向かいて問い懸かけたり。車夫の老人は年とし紀すでに五十を越えて、六十にも間はあらじと思わる。餓えてや弱々しき声のしかも寒さにおののきつつ、

「どうぞまっぴら御免なすつて、向後こうごきつと氣を着けまする。
へいへい」

と、どぎまぎして慌あわておれり。

「爺さん慌てなさんな。こうおり己や巡査じゃねえぜ。え、おい、かわいそうによつぽど面食らつたと見える、全体おめえ、氣が小さすぎらあ。なんの縛ろうとは謂いやしめえし、あんなにびくび

くしねえでもものことさ。おらあ片一方で聞いててせえ少癩癩すこかんしやくに障さわつて堪こたえられなかつたよ。え、爺さん、聞きやおめえの扮装みなりが悪いとつて咎とがめたようだが、それにしちやあ咎めようが激しいや、ほかにおめえなんぞ仕損しぞこないでもしなすつたのか、ええ、爺さん」

問われて老車夫は吐息をつき、

「へい、まことにびつくりいたしました。巡査おまわりさんに咎められましたのは、親父おやじ今がはじめてで、はい、もうどうなりますことやらと、人心地ごこちもござりませなんだ。いやもうから意気地いくじがござりません代わりにや、けつして後ろ暗いことはいたしません。ただいまとても別にぶちようほうのあつたわけではござりませんが、股引きももひが破れまして、膝ひざから下むきだが露出むきだしてござりますので、見苦しいと、こんなにおつしやります、へい、御規

則も心得ないではござりませんが、つい届きませんもんで、へい、だしぬけにこら！　つて喚わめかれましたのに驚きまして、いまだに胸がどきどきいたしまする」

壮伎はしきりに頷うなずけり。

「むむ、そうだろう。気の小さい維新むかし前の者は得て巡的をこわがるやつよ。なんだ、高がこれ股引きがねえからとつて、ぎょうさんに咎め立てをするにやあたらねえ。主の抱かかえ車ぐるまじゃあるめえし、ふむ、よけいなおせつかいよ、なあ爺さん、向こうから謂わねえたつて、この寒いのに股引きはこつちで穿はきてえや、そこがめいめいの内証で穿けねえから、穿けねえのだ。何も穿かねえというんじゃねえ。しかもお提灯ちようちんより見つこのねえ闇夜やみだろうじゃねえか、風俗も糸瓜へちまもあるもんか。うぬが商売で寒い思いをするからたつて、何も人民にあたるにやあ及ばねえ。

ん！ 寒鴉かんがらすめ。あんなやつもめつたにやねえよ、往来の少ない
処ところなら、昼だつてひよぐるぐらいは大目に見てくれらあ、業腹
な。おらあ別に人の禪襠ふんどしで相撲すもうを取るにもあたらねえが、これ
が若いものでもあることか、かわいそうによぼよぼの爺さんだ。
こう、腹あ立てめえよ、ほんにさ、このざままで腕車くるまを曳ひくなあ、
よくよくのことだと思ひねえ。チョツ、べら棒め、サーベルが
なけりや袋叩ふくろたたきにしてやろうものを、威張るのもいいかげんに
しておけえ。へん、お堀端あこちとらのお成り筋だぞ、まかり
間違やあ胴上げして鴨かものあしらいにしてやらあ」
口を極まめてすでに立ち去りたる巡査を罵り、満腔まんこうの熱気を吐
きつつ、思わず腕さすを擦りしが、四谷組合しると記したる煤すすけ提灯ちようちんの
蠟燭ろうそくを今継ぎ足して、力なげに梶棒かじぼうを取り上ぐる老車夫の風采ふうさい
を見て、壮佼わかもは打ち悄しおるるまでに哀れを催し、「そうして爺さん

稼人かせぎてはおめえばかりか、孫子はねえのかい」

優しくい謂いわれて、老車夫は涙ぐみぬ。

「へい、ありがとう存じます、いやも幸いと孝行なせがれが一人おりました、よう稼かせいでくれました、おまえさん、こんな晩にや行火あんかを抱いて寝ていられるもつたいない身分でござりましたが、せがれはな、おまえさん、この秋兵隊に取られましたので、あとには嫁と孫が二人みんな快う世話をしてくれませんが、なぶん活計くらしが立ちかねますので、蛙かえるの子は蛙になる、親仁おやしももとはこの家業をいたしておりましたから、年とし紀は取つてもちつとは呼吸がわかりますので、せがれの腕車くるまをこうやつて曳ひきますが、何が、達者で、きれいで、安いという、三拍子も揃そろつたのが競争をいたしますのに、私のような腕車には、それこそお茶人か、よつほど後生のよいお客でなければ、とても乗つてはく

れませんで、稼ぐに迫り着く貧乏なしとはいひますが、どうしていくら稼いでもその日を越すことができにくうござりますから、自然装なりなんぞも構うことはできませんので、つい、巡査おまわりさんに、はい、お手数を懸かけるようにもなります」

いと長々しき繰り言をまだるしとも思わで聞きたる壮俊は一方ひとかたならず心を動かし、

「爺さん、いやたあ謂われねえ、むむ、もつともだ。聞きや一人息子むすこが兵隊になつてるといふじゃねえか、おおかた戦争にも出るんだらう、そんなことなら黙つていないで、どしどし言い籠こめて隙ひまあ潰つぶさした埋め合わせに、酒代さかてでもふんだくつてやればいいに」

「ええ、めつそうな、しかし申しわけのためばかりに、そのことも申しましたなれど、いつこうお肯きき入れがござりませんので」

壮俊はますます憤りひとしお憐れみて、

「なんとという木念人ぼくねんじんだろう、因業な寒鴉め、といったところで仕方もないかい。ときに爺さん、手間は取らさねえからそいらまでいつしよに歩あゆびねえ。股火鉢またひばちで五合ごんつくとやらかそう。ナニ遠慮しなさんな、ちと相談もあるんだからよ。はて、いいわな。おめえ稼業にも似合わねえ。ばかめ、こんな爺さんを掴つかめえて、剣突けんつくもすさまじいや、なんだと思つていやがんでえ、こう指一本でも指さしてみる、今じゃおいらが後見だ」

憤慨と、軽侮と、怨恨えんこんとを満たしたる、視線の赴くところ、趨こうじ町一番町英国公使館の土塀どべいのあたりを、柳の木立ちに隠見して、角燈あり、南をさして行く。その光は暗夜あんやに怪獣の眼まなこのごとし。

公使館のあたりを行くその怪獣は八田義延はつたよしのぶという巡查なり。
 渠かれは明治二十七年十二月十日の午後零時をもつて某町なにかしまちの交番を
 発し、一時間交替の巡回の途に就つけるなりき。

その歩行あゆむや、この巡查には一定の法則ありて存するがごとく、
 晩おそからず、早からず、着々歩を進めて路みちを行くに、身体からだはきつ
 として立ちて左右に寸毫すんごうも傾かず、決然自若たる態度には一種
 犯すべからざる威厳を備えつ。

制帽ひさしの庇ひさしの下にもものすごく潜める眼光は、機敏と、銳利と嚴
 酷とを混じたる、異様の光に輝けり。

渠は左右のものを見、上下のものを視ながむるとき、さらにその
 顔を動かし、首を掉ふることをせざれども、瞳ひとみは自在に回転して、
 随意にその用を弁ずるなり。

されば路すがらの事々物々、たとえばお堀端ほりばたの芝生しばふの一面に白くほの見ゆるに、幾条くちなわの蛇はの這えるがごとき人の踏みしだきたる痕あとを印せること、英国公使館の二階なるガラス窓の一面に赤黒き燈火の影の射させること、その門前なる二柱ちゆうのガス燈の昨夜よりも少しく暗きこと、往来のまん中に脱ぎ捨てたる草鞋わらじの片足の、霜いに凍つて附つきて堅かくなりたること、路傍みちばたにすくすくと立ちなら併なべる枯れ柳の、一陣の北風に颯さと音なしていつせいに南みなに靡なびくこと、はるかあなたにぬつくと立てる電燈局の煙筒いちろより一縷いちろの煙の立ち騰のぼること等、およそ這般このはんのささいなる事がらといえども一つとしてくだんの巡査の視線以外のがに免まるることを得ざりしなり。

しかも渠は交番を出いでて、路に一個の老車夫を叱責しつせきし、しかしてのちこのところに来たれるまで、ただに一回も背後うしろを振り

返りしことあらず。

渠は前途に向かいて着眼の鋭く、細かに、きびしきほど、背後うしろには全く放心せるもののごとし。いかんとなれば背後はすでにいったんわが眼まなこに檢察して、異状なしと認めてこれを放免したるものなればなり。

兇徒きようとうあり、白刃を揮ふるいて背後うしろより渠を刺さんか、巡査はその呼吸いきの根の留まらんまでは、背後うしろに人あるということに、思いたることはなかるべし。他なし、渠はおのが眼まなこの觀察の一度達したるところには、たとい藕糸ぐうしの孔中といえども一点の懸念をだに遺のこしおかざるを信ずるによれり。

ゆえに渠は泰然と威嚴を存して、他意なく、懸念なく、悠々ゆうゆうとしてただ前途のみを志すを得うるなりけり。

その靴くつは霜のいと夜深きに、空谷を鳴らして遠く跫音きようおんを送り

つつ、行く行く一番町の曲がり角のややこなたまで進みけると
き、右側のとある冠木門かぶぎの下に踞うずくまれる物体ありて、わが蹠音あしおと
に蠢うごめけるを、例の眼にてきつと見たり。

八田巡査はきつと見るに、こはいと窶やつやつ々しき婦人おんななりき。

一個ひとりの幼児おきなごを抱きたるが、夜深よふけの人目なきに心を許しけん、
帯を解きてその幼児を膚しに引き緊しめ、着らたる襪らんるの綿入れふすまを衾
となして、少しにても多量の暖を与えんとせる、母の心はいか
なるべき。よしやその母子おやこに一銭の恵みを垂たれずとも、たれか
憐あわれと思わざらん。

しかるに巡査は二つ三つ婦人の枕頭まくらもとに足踏みして、

「おいこら、起きんか、起きんか」

と沈みたる、しかも力を籠こめたる声にて謂えり。

婦人はあわただしく蹶はね起きて、急に居住つくらまいを繕つくろいながら、

「はい」と答うる齒の音も合わず、そのまま土に頭を埋めぬ。

巡査は重々しき語気をもて、

「はいではない、こんな処ところに寝ていちゃあいかん、疾はやく行け、なんという醜態だ」

と鋭き音調。婦人は恥じて呼吸いきの下にて、

「はい、恐れ入りましたでございます」

かく打ち謝罪わぶるときしも、幼児は夢を破りて、睡眠のうちに忘れたる、饑うえと寒さとを思い出し、あと泣き出だす声も疲労のために裏溷うらがれたり。母は見るより人目も恥じず、慌あわてて乳房ちゅうぶさを含ませながら、

「夜分のごとでございますから、なにとぞ旦那様だんなお慈悲でございます。大眼おおめに御覧あそばして」

巡査は冷然として、

「規則に夜昼はない。寝ちやあいかん、軒下で」

おりからひとしきり荒ぶ風は冷を極めて、手足も露わなる婦人の膚を裂きて寸断せんとせり。渠はぶるぶると身を震わせ、鞠のごとくに竦みつつ、

「たまりません、もし旦那、どうぞ、後生でございます。しばらくここに置きあそばしてくださいまし。この寒さにお堀端の吹き曝しへ出ましては、こ、この子がかわいそうでございませす。いろいろ災難に逢いまして、にわか物貫いで勝手は分りませす……」といいかけて婦人は咽びぬ。

これをこの軒の主人に請わば、その諾否いまだ計りがたし。しかるに巡査は肯き入れざりき。

「いかん、おれがいったんいかんといつたらなんといつてもいかなのだ。たといきさまが、観音様の化身でも、寝ちやならな

い、こら、行けというに」

三

「伯父おじさんおあぶのうございますよ」

半蔵門の方より来たりて、いまや堀端ほりばたに曲がらんとするとき、
一個の年紀としわか少わかき美人はその同伴つれなる老人の蹣跚まんさんたる酔歩に向か
いて注意せり。渠かれは編み物の手袋を嵌はめたる左の手にぶら提灯ぢようちん
を携えたり。片手は老人を導きつつ。

伯父さんと謂われたる老人は、ぐらつく足を踏ふみ占めながら、
「なに、だいじょうぶだ。あれんばかしの酒にたべ酔つてたま
るものかい。ときにもう何時なんどきだろう」

夜は更ふけたり。天色沈々として風騒がず。見渡すお堀端の往来

は、三宅坂みやけにて一度尽き、さらに一帯の樹立こたちと相連なる煉瓦屋れんがおくにて東京のその局部を限れる、この小天地せき寂として、星のみひややかに冴さえ渡れり。美人は人ほしげに振り返りぬ。百歩を隔てて黒影あり、靴くつを鳴らしておもむろに來たる。

「あら、巡査おまわりさんが來ましたよ」

伯父なる人は顧みて角燈の影を認むるより、直ちに不快なる音調を帯び、

「巡査がどうした、おまえなんだか、うれしそうだな」

と女むすめの顔かほを瞻みまもれる、一眼し盲めくらいて片眼鏡へんがんし。女はギツクリとしたる様さまなり。

「ひどく寂しゅうございますから、もう一時前でもございませうか」

「うん、そんなものかもしれない、ちつとも腕車くるまが見えんから

「な」

「ようございますわね、もう近いんですもの」

やや無言にて歩を運びぬ。酔える足は撻取^{はかど}らで、靴音は早や近づきつ。老人は声高に、

「お香^{ことう}、今夜の婚礼はどうだった」と少しく笑^えみを含みて問いぬ。

女は軽^{かろ}くうけて、

「たいそうおみごとでございました」

「いや、おみごとばかりじゃあない、おまえはあれを見てなんと思つた」

女は老人の顔を見たり。

「なんですか」

「さぞ、うらやましかつたらうの」という声は嘲^{あざけ}るごとし。

女は答えざりき。渠はこの一冷語のためにいたく苦痛を感じたる状さま見えつ。

老人はさこそあらめと思える見得みえにて、

「どうだ、うらやましかつたろう。おい、お香、おれが今夜あすこ彼家の婚礼の席へおまえを連れて行った主意を知つとるか。十二、はいだ。はいじゃない。その主意を知つてるかよ」

女は黙しぬ。首こうべを低たれぬ。老夫はますます高調子。

「解わかるまい、こりやおそらく解るまいて。何も儀式を見習わせようためでもなし、別に御馳走ごちそうを喰くわせたいと思ひもせずさ。ただうらやましがらせて、情けなく思わせて、おまえが心に泣いている、その顔を見たいばかりよ。ははは」

口氣しゅふん酒芬を吐おきもて面をも向くべからず、女は悄然しやうぜんとして横に背そむけり。老夫はその肩に手を懸かけて、

「どうだお香、あの縁女えんじよは美しいの、さすがは一生の大札だ。あのまた白と紅あかとの三枚襲がさねで、と羞はずかしそうに坐すわつた恰好かっこうというものは、ありや婦人おんなが二度とないお晴れだな。縁女もさ、美しいは美しいが、おまえにや九目せいもくだ。婿もりつばな男だが、あの巡査にや一段劣る。もしこれがおまえと巡査とであつてみる。さぞ目の覚さむることだろう。なあ、お香、いつぞや巡査がおまえをくれろと申し込んで来たときに、おれさえアイと合点がってんすりや、あべこべに人をうらやましがらせてやられるところよ。しかもおまえが（生命いのちかけても）という男だもの、どんなにおめでたかつたかもしれやアしない。しかしどうもそれ随意まにならぬのが浮き世つてな、よくしたものさ。おれという邪魔者がおつて、小気味よく断わつた。あいつもとんだ恥を搔かいたな。はじめからできる相談か、できないことか、見当をつけて懸かければ

よいのに、何も、八田も目先の見えないやつだ。ばか巡査！」
「あれ伯父さん」

と声ふるえて、後ろの巡査に聞こえやせんと、心を置きて振り返れる、眼まなこに映ずるその人は、……夜目にもいかで見紛みまがうべき。

「おや！」と一言われ知らず、口よりもれて愕然がくぜんたり。

八田巡査は一注の電気に感ぜしごとくなりき。

四

老人はとつさの間に演ぜられたる、このキツカケにも心着か
でや、さらに気に懸かくる様子もなく、

「なあ、お香、さぞおれがことを無慈悲なやつと怨うらんでいよう。

吾^おやおまえに怨まれるのが本望だ。いくらでも怨んでくれ。どうせ、おれもこう因業^{いんごう}じゃ、いい死に様もしやアしまいが、何、そりやもとより覚悟の前だ」

真顔になりて謂^いう風情^{ふうせい}、酒の業^{わざ}とも思われざりき。女^{むすめ}はようよう口を開き、

「伯父^{おじ}さん、あなたまあ往来^{わらい}で、何をおつしやるのでございませぬ。早く帰ろうじゃございませぬか」

と老人の袂^{たもと}を曳^ひき動かし急ぎ巡査を避けんとするは、聞くに堪えざる伯父の言^{ことば}を渠^{かれ}の耳に入れじとなるを、伯父は少しも頓着^{とんじやく}せで、平気に、むしろ聞こえよがしに、

「あれもさ、巡査だから、おれが承知しなかつたと思われると、何か身分のいい官員か、金満^{かねもち}でも扱^{えら}んでいて、月給八円におぞ毛をふるつたようだが、そんな賤^{いや}しい了簡^{りようけん}じゃない。おまえの

きらいな、いつしよになると生き血を吸われるような人間でな、たとえばかつたい坊だとか、高利貸しだとか、再犯の盗人ぬすつととでもいうような者だったら、おれは喜んで、くれてやるのだ。乞食こじきでもあつてみる、それこそおれが乞食をしておれの財産をみなそいつに譲つて、夫婦めおとにしてやる。え、お香、そうしておまえの苦しむのを見て楽しむさ。けれどもあの巡査はおまえが心しんからすいてた男だろう。あれと添われなけりや生きてる効かいがないとまでに執心の男だ。そこをおれがちゃんと心得てるから、きれいさつぱりと断わつた。なんと慾よくのないもんじゃあるまいか。そこでいったんおれが断わつた上はなんでもあきらめてくれなければならぬと、普通なみの人間ならいうところだが、おれがのはそうじゃない。伯父さんがいけないとおつしやつたから、まあ私も仕方がないと、おまえにわけもなく断念あきらめてもらった日

にやあ、おれが志も水の泡あわさ、形なしになる。ところで、恋というものは、そんなあさはかなもんじゃあない。なんでも剛胆けんのんなやつが危険な目に逢あえば逢うほど、いつそう剛胆になるように、何かしら邪魔がはいれば、なおさら恋しゆうなるものでな、とても思い切れないものだということを知っているから、ここでおもしろいのだ。どうだい、おまえは思い切れるかい、うむ、お香、今じゃもうあの男を忘れたか」

女はややしばらく黙したるが、

「い……い……え」ときれぎれに答えたり。

老夫は心地こちちよげに高く笑い、

「むむ、もつともだ。そうやすつぽくあきらめられるようでは、わが因業も価値ねうちがねえわい。これ、後生だからあきらめてくれるな。まだまだ足りない、もつとその巡查を慕うてもらいたい

ものだ」

女はこらえかねて顔を振り上げ、

「伯父さん、何がお気に入りに入りませんで、そんな情けないことをおっしゃいます、私は、……」と声を飲む。

老夫は空嘯そらうそひき、

「なんだ、何がお気に入りに入りませんか？ 謂いうな、もつたいない。なんだってまたおそろくおまえほどおれが気に入ったものはあるまい。第一容色きりようはよし、氣立てはよし、優しくはある、することなすこと、おまえのことといつたら飯のくいようまで気に入る。しかしそんなことで何、巡査をどうするの、こうするのという理窟りくつはない。たといおまえが何かの折に、おれの生命いのちを助けてくれてさ、生命の親と思えばとても、けつして巡査にやあ遣やらないのだ。おまえが憎い女ならおれもなに、邪魔をしや

あしねえが、かわいいから、ああしたもののき。気に入るの入れないのと、そんなこたあ言つてくれるな」

女は少しきつとなり、

「それではあなた、あのおかたになんぞお悪いことでもござい
ますの」

かく言い懸けて振り返りぬ。巡査はこのとき囁く声をも聞く
べき距離に着々として歩しおれり。

老夫は頭を打ち掉りて、

「う、んや、吾やあいつも大好きさ。八円を大事にかけて、世
の中に巡査ほどのものはないと澄ましているのが妙だ。あまり
職掌を重んじて、苛酷だ、思い遣りがなさすぎると、評判の悪
いのに頓着なく、すべ一本でも見免ささない、アノ邪慳非道など
ころが、ばかにおれは氣に入つてる。まず八円の価値はあるな。

八円じゃ高くない、ろく禄盗人とはいわれぬ、まことにりつぱな八円様だ」

女はたまらず顧みて、小腰をかが屈め、片手をあげてソト巡査を拝みぬ。いかにお香はこのふるまい振舞を伯父に認められじとはつと勉めけん。瞬間にまた頭をこうべ返して、八田がなんらの挙動をもてわれに答えしやを知らざりき。

五

「ええと、八円様に不足はないが、どうしてもおまえを遣やることはできないのだ。それもあいつがうわき浮気もので、ちよいと色に迷ったばかり、おいやならよしなさい、よそを聞いてみますという、お手軽なところだと、おれも承知をしたかもしれんが、ど

うしておれが探つてみると、よしのぶ義延（巡査の名）という男はそんな男と男が違ちがう。なんでも思い込んだらどうしても忘れることのできたない質で、やっぱりおまおんなじえと同一ように、自殺でもしたというふうだ。ここでおもしろいて、はははははは」とあざわら冷笑えり。

むすめ女は声をふるわして、

「そんなら伯父さん、まあどうすりやいいのでございます」と
思い詰つめたる体にて問いぬ。

伯父は事もなげに、

「どうしてもいけないのだ。どんなにしてもいけないのだ。と
てもだめだ、なんにもいうな、たといきどうしても肯ききやあしな
いから、お香、まあ、そう思しつてくれ」

女はわつと泣きだしぬ。かれ渠は途中なることをも忘れたるなり。

伯父は少しも意に介せず、

「これ、一生のうちにとだ一度いおうと思つて、今までおまえにもだれにもほのめかしたこともないが、ついでだから謂いつて聞かす。いいか、亡なくなつたおまえのお母つかさんはな」

母という名を聞くやいなや女はにわかにに聞き耳立てて、

「え、お母さんが」

「むむ、亡ほくなつた、おまえのお母さんには、おれが、すっかり惚ほれていたのだ」

「あら、まあ、伯父さん」

「うんや、驚くこたあない、また疑うにも及ばない。それを、そのお母さんを、おまえのお父とつさんに奪とられたのだ。な、解わかつたか。もちろんおまえのお母さんは、おれがなんだということも知らず、弟おとともやつぱり知らない。おれもまた、口へ出したこと

はないが、心では、心では、実におりやもう、お香、おまえはその思い遣りがあるだろう。巡査というものを知ってるから。婚礼の席に連なつたときや、明け暮れそのなかのいいのを見ていたおれは、ええ、これ、どんな気がしたとおまえは思う」

という声濁りて、痘痕とうこんの充てる頬骨ほおぼね高き老顔の酒気を帯びたるに、一眼の盲しいたるがいとものすごきものとなりて、拉とりひしぐばかり力を籠こめて、お香の肩を掴つかみ動かし、

「いまだに忘れない。どうしてもその残念さが消え失うせせない。

そのためにおれはもうすべての事業を打ち棄すてた。名譽も棄てた。家も棄てた。つまりおまえの母親が、おれの生涯しょうがいの幸福と、希望とをみな奪つたものだ。おれはもう世の中に生きてる望みはなくなつたが、ただ何とぞしてしかえしがしたかつた、といつて寝刃ねたばを合わせるじゃあない、恋に失望したもののその苦痛くるしみと

いうものは、およそ、どのくらいであるということ、思い知らせたいばかりに、要らざる生命をなごらえたが、慕い合つて望みが合うた、おまえの両親に対しては、どうしてもその味を知らせよう手段がなかつた。もうちつと長生きをしていりや、そのうちにはおれが仕方を考えて思い知らせてやろうものを、ふしあわせだか、しあわせだか、二人ともなくなつて、残つたのはおまえばかり。親身といつてほかにはないから、そこでおいらが引き取つて、これだけの女にしたのも、三代崇る執念で、親のかわりに、なあ、お香、きさまに思い知らせたさ。幸い八田という意中人が、おまえの胸にできたから、おれも望みが遂げられるんだ。さ、こういう因縁があるんだから、たとい世界の金満におれをしてくれるといつたつて、とても謂うこたあ肯かれない。覚悟しろ！

所詮だめだ。や、こいつ、耳に蓋をし

ているな」

眼めにいつぱいの涙を湛たえて、お香はわなわなふるえながら、両袖そでを耳にあてて、せめて死刑の宣告を聞くまじと勤めたるを、老夫は残酷にも引き放ちて、

「あれ！」と背そむくる耳に口、

「どうだ、解わかったか。なんでも、少しでもおまえが失望の苦痛くるしみをよけいに思い知るようにする。そのうち巡査のことをちつとでも忘れると、それ今夜のように人の婚礼を見せびらかしたり、気の悪くなる談話はなしをしたり、あらゆることをして苛いじめてやる」

「あれ、伯父さん、もう私は、もう、ど、どうぞ堪忍してくださいまし。お放しなすつて、え、どうしようねえ」

とおぼえず、声を放ちたり。

少し距離を隔てて巡行せる八田巡査は思わず一足前に進みぬ。

渠はそこを通り過ぎんと思ひしならん。さりながらえ進まざりき。渠は立ち留まりて、しばらくして、たじたじとあとに退りぬ。巡査はこのところを避けんとせしなり。されども渠は退かざりき。造次の間八田巡査は、木像のごとく突つ立ちぬ。さらに冷然として一定の足並みをもて肅々と歩み出だせり。ああ、恋は命なり。間接にわれをして死せしめんとする老人の談話を聞くことの、いかに巡査には絶痛なりしよ。ひとたび歩を急せんか、八田は疾に渠らを通り越し得たりしならん、あるいはことさらに歩をゆるうせんか、眼界の外に渠らを送遣し得たりしならん。されども渠はその職掌を堅守するため、自家が確定せし平時における一式の法則あり。交番を出でて幾曲がりの道を巡り、再び駐在所に帰るまで、歩数約三万八千九百六十二と。情のために道を迂回し、あるいは疾走し、緩歩し、立停するは、

職務に尽くすべき責任に対して、渠が屑いさぎよしとせがりしところなり。

六

老人はなお女の耳を捉とらえて放たず、負われ懸くるがごとくにして歩ある行きながら、

「お香、こうは謂うものな、おれはおまえが憎かあない、死んだ母親にそつくりでかわいくつてならないのだ。憎いやつなら何もおれが仕返しをする価値ねうちはないのよ。だからな、食うことも衣きることも、なんでもおまえの好きなおり、おりや衣きないでもおまえには衣せる。わがままいっばいさしてやるが、ただあればかりはどんなにしても許さんのだからそう思え。おれ

ももう取る年だし、死んだあとでと思うであらうが、そううまくはさせやあしない、おれが死ぬときはきさまもいつしよだ」

恐ろしき声をもて老人が語れるその最後の言を聞くことばと齊しく、お香はもはや忍びかねけん、力を極めて老人が押えたる肩を振り放し、ばたばたと駈け出だして、あわやと見る間に堀端の土手へひたりと飛び乗たり。コハ身を投ぐる！ と老人は狼狽えて、引き戻さんと飛び行きしが、酔眼に足場をあやまり、身を横ざまに霜を迂りて、水にざんぶと落ち込みたり。

このとき疾く救護のために一躍して馳せ来たれる、八田巡査を見るよりも、

「義さん」と呼吸せわしく、お香は一声呼び懸けて、巡査の胸に額を埋めわれをも人をも忘れしごとく、ひしとばかりに縋り着きぬ。鳶をその身に絡めたるまま枯木は冷然として答えもな

さず、堤防の上につと立ちて、角燈片手に振り翳し、水をきつと瞰下ろしたる、ときに寒冷謂うべからず、見渡す限り霜白く墨より黒き水面に烈しき泡の吹き出ずるは老夫の沈める処と覺しく、薄氷は亀裂しおれり。

八田巡査はこれを見て、躊躇するもの一秒時、手なる角燈を差し置きつ、と見れば一枝の花簪の、徽章のごとくわが胸に懸かれるが、ゆらぐばかりに動悸烈しき、お香の胸とおのが胸とは、ひたと合いてぞ放れがたき。両手を静かにふり払いて、

「お退き」

「え、どうするの」

とお香は下より巡査の顔を見上げたり。

「助けてやる」

「伯父さんを？」

「伯父でなくつてだれが落ちた」

「でも、あなた」

巡査は儼然げんぜんとして、

「職務だ」

「だつてあなた」

巡査はひややかに、「職掌だ」

お香はにわかにな着き、またさらに蒼あおくなりて、

「おお、そしてまああなた、あなたはちつとも泳ぎを知らない
じゃありませんか」

「職掌だ」

「それだつて」

「いかん、だめだもう、僕も殺したいほどの老翁おやじだが、職務だ！

断念あきらめろ」

と突きやる手に喰い附くばかり、

「いけませんよう、いけませんよう。あれ、だれぞ来てくださいな。助けて、助けて」と呼び立つれど、土塀石垣寂として、前後十町に行人絶えたり。

八田巡査は、声をはげまし、

「放さんか！」

決然として振り払えば、力かなわで手を放てる、咄嗟に巡査は一躍して、棄つるがごとく身を投ぜり。お香はハツと絶え入りぬ。あわれ八田は警官として、社会より荷える負債を消却せんがため、あくまでその死せんことを、むしろ殺さんことを欲しつつありし悪魔を救わんとして、氷点の冷、水凍る夜半に泳ぎを知らざる身の、生命とともに愛を棄てぬ。後日社会は一般に八田巡査を仁なりと称せり。ああはたして仁なりや、しかも

一人の渠かれが残忍苛酷かこくにして、恕じよすべき老車夫を懲罰し、憐あわれむべき母と子を嚴責したりし尽瘁じんすいを、讚歎さんたんするもの無きはいかん。

(明治二十八年四月「文芸倶楽部」)

夜行巡查

底本：「高野聖」角川文庫、角川書店

1971（昭和 46）年 4 月 20 日改版初版発行

1999（平成 11）年 2 月 10 日改版 40 版発行

初出：「文芸倶楽部」

1895（明治 28）年 4 月

入力：真先芳秋

校正：鈴木厚司

1999 年 9 月 10 日公開

2005 年 12 月 4 日修正

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp>) で作られました。入力、校正、制作に
あたったのは、ボランティアの皆さんです。